

リスニング指導に於ける LL 利用の効果

——アクティブ・リスニング・コースの理論と実践——

杉本 孝子

1. アクティブ・リスニング・コースと LL

アクティブ・リスニング・コースはリスニングの力を集中的に強化訓練することを目的とし、前期と後期それぞれに於いて基礎及び中級レベルの授業内容を展開するものである。本コースを担当するにあたり、以上の目的と内容を重視したシラバスデザインを考え、効率的な授業進行のために LL 利用を必須の条件とした。1995年度のアクティブ・リスニング・コースは新しい試みとして実験的な要素もあり、立教大学の学生が LL 授業にどのように反応し、どの程度までリスニングの力を伸ばすことができるかについて関心のあるところであった。ここに報告する学生のリスニング力伸長の成果とこれを支える LL 授業の理論と実践例が、今後の立教大学の音声言語教育のひとつの指針になればと思う。

担当の ALC 文2B～E クラスは英米文学科 2 年生の 39 名クラスである。聴解力養成の LL 授業を初めて体験するという学生がほとんどで、4 月初めの頃は学生の表情に期待とともに不安や

緊張感が見受けられた。授業方法の基本は地域差、年齢差、社会階層差を含めた多様な英語音声を大量に聞き、これをフルラボの機能を活用して消化するというものである。教材は音声テープとビデオを併用し、視聴覚教育の効果を取り入れ、学生にとって興味ある授業内容になるよう工夫した。使用した主教材は次のようである。

〈音声テープ対応教材〉

Listen for It (Oxford University Press)

Active Listening-Building
(Cambridge University Press)

〈ビデオ対応教材〉

Out of the Blue (Longman Group UK Limited)

Headway Video-Elementary (Oxford University Press)

この他に副教材として *Essential Guide to Britain* (BBC English), *Great Speeches* (The Educational Video Group), *Pronunciation Training System* (Kawai), *Beauty and the Beast* (The Walt Disney Company), *Anne of Green Gables* (The Walt Disney Company) 等のビデオ教材を

加え、学習目的に合わせて編集した音声テープ教材を活用した。

本コースの指導上の指針は次のようにまとめ、年間の授業計画の柱とした。

1. 大量で多様な英語音声を聞かせる。
2. 言語が使われる場面を重視し、場面と結びついた聞き取りをさせる。
3. 学習者の立場に立って学習状況を把握し、助言をする。
4. 毎回の授業を効率化する。
5. シラバスに合わせて指導法をシステム化する。

以上の点は教材選択、指導法、LLの使い方に反映され、実際の授業の中で実践されている。例えば、1.については学生が一年間に学習する主教材の量が多く、音声英語の範疇がイギリス英語、アメリカ英語に留まらず、幅広いこと、2.についてはナチュラルスピードの英語音声を聞かせ、“いつ、どこで、だれが、どんなふうに話しているか”に関心を持たせ、音を拾うだけでなく、「意味」がわかる聞き取りを指導したこと、また、場面を視覚的に理解できるビデオ教材を積極的に活用したこと、3.についてはリスニング力の伸びを計るテストを実施し、学生自身に学習効果を認識させ、提出物のエラー・アナリシスやLLのモニタリングを通して学生ひとりひとりに合った助言をしたこと、4.については効率的な授業進行のための教材編集、授業目的に合わせたLL機能の選択に留意し

たこと、5.については基礎から中級レベルに達する段階的な指導を、教材配列に沿って最も効果的なLLの使い方と組み合わせて進めたことである。

音声言語の指導では、学習者の年齢と言語能力に配慮した授業計画が指導の成功を左右するのであるが、コーススタート時の学生のリスニングの力はリーディングの力と比べて極めて低く、基本的なコミュニケーションに必要な「聞く力」を備えているようには見受けられなかった。大学2年生ではあるが、スタートを初級レベルに置き、リスニングの勉強方法から教えねばならないという状況であった。こうしたなかで中級の到達レベルを目指し、大学生の知的欲求を満たす教材内容を消化するまでに導くためには、授業の効率化は避けられず、これに応えるフルラボ設備の利用が求められた。幸いにも4406(LL)教室を使用することができ、LL指導の成果を学生に還元することができた。

ただし、4406(LL)教室の教室設計や機器配置は旧式で使いづらかったと言える。現在のLLでは学生ブースと教師側の調整卓との間に仕切りのないオープン型が主流であるが、4406教室は教室内に調整室があり、教師が調整室を出ない限り、学生と教師は分断され、学生の表情を見ながら効率的に教材を送り出すことは不可能である。また、調整卓に全操作を一括管理する機能が無く、機器配置に無理があることから、映像、音声、文字情報を交

互に迅速に送出して反応力を高めていくような授業形態は難しいと思われた。

これは4406 (LL) 教室が音声テープ中心の訓練型授業に合わせて設計されており、現在のようなマルチメディア対応の授業形態を想定したものではないことからきている。近年にみる高性能の教材提示装置、ビデオ、コンピュータの導入は、LLの授業内容や教授法に大きな変革をもたらし、1940年代末の米国の構造言語学と行動主義心理学の影響を受けて広く普及した音声面の模倣・反復練習中心の教授法の流れを変えることとなった。さらに、40数年を経た日本のLL教育の歴史の中で、日本人学習者にとっての効果的なLL利用が再検討され、指導目的に合わせた独創的な教授法の開発が進められている。

今回のアクティブ・リスニング・コースは、以上のような設備上の制約を受けながら、録音、再生、ドリル、モニター、インターカムなど、LLの基本機能を使い、担当クラス用に編集・加工した教材を取り入れて授業を進めたものである。

2. LL 授業の進め方

2-1. 授業を始めるまえに

LL 授業に入る前に、学生が本コースに何を期待し、また、どのような意識で参加したのかを知るために、簡単なアンケートを行なった。その中で注目すべきことは、ごく一部にレベルの高い授業内容を望む声がある一方で、

大多数の学生は授業内容をこなせるかどうかについて不安を感じているということであった。これは学生が自分のリスニングの力不足を知り、自信を持ってないということに起因するのであるが、勉強方法が分からないということが、不安を大きくしていると考えられた。

外国語学習の上で精神的な不安はマイナス要因となる場合が多い。これを避けるためにもシステム化したLL学習の効果を実績で示し、リスニングとリーディングの学習方法の違いを説明することは必要である。例えば、リーディングは読むスピードを自分で調節できるが、リスニングではそれができないこと、講読などの授業で身に付けた文法・訳読法がリスニングの学習では役に立たないことなどを具体例をあげて説明するだけでも、学生の不安材料を減らすことにつながるのである。このように実際の授業に入る前に学習者の立場を理解することはその後の授業効率を高めることになる。そして標準テストなどにより、実際に学習者自身に聴解力の伸長度を知らせることは積極的な授業参加を促すものと期待できる。

2-2. 年間の授業計画

担当のアクティブ・リスニング・クラスの授業回数は26回で、前期は初級の基礎固め、後期は中級の応用力養成を目指し、ほぼ次のように授業を進めた。

次頁の表は年間授業の大まかな流れ

期間	使用主教材		主な授業内容	その他
前期 4月24日 ↓ 7月17日	音声テープ <i>Listen for It</i> <4/24~>	ビデオ <i>Out of the Blue</i> <4/24~>	音声テープによるリスニング・コンプリヘンション (ナチュラルスピードの英語音声に慣れ、概要を理解する) ビデオの音声を利用したディクテーション (音の識別、聞きにくい音の分析)	4/24 第1回聴解力テスト (授業開始前の聴解力測定) 7/17 中間テスト
夏休み 7月29日 ↓ 9月19日		<i>Beauty and the Beast</i>	プリントとテープの宿題 (自宅学習によるリスニング学習の継続)	9/12~9/19 「英語夏期実力アップ講座」を開催し、自由参加とする
後期 9月25日 ↓ 1月8日 冬休み 12月25日 ↓ 1月6日	<i>Listen for It</i> <~11/20> <i>Active Listening</i> <11/27~12/18> <i>Listen for It</i> の一部 (小テスト用) <11/27~12/18>	<i>Out of the Blue</i> <~10/16> <i>Headway</i> <10/30~12/11>	テープ、ビデオによる大量の英語音声の聞き取り (ヘッドセット無しの普通の環境での聞き取り練習も取り入れる) 説明・解説の要点把握 (ビデオの映像、音声それぞれの学習効果を利用) 前期教材を再利用した小テストを毎回実施 (細部を正確に聞いてすばやく書き取る力の養成…中級レベル)	10/23 第2回聴解力テスト (これまでの聴解力の伸びを計る) 12/4 第3回聴解力テスト (年間の聴解力の伸びを計る) 1/8日 学年末試験

であり、ここに盛り込まれた副教材やLLの使い方はいつも同じとは限らない。学生にとって、毎回の90分間に手を変え、品を変えて聞かされる大量の英語音声は、とりわけ初めのうちは疲労を感じさせるものだったと思われる。また、ビデオの音声を録音したカセット・テープを自宅に持ち帰り、聞き取った英語をワープロで打ち出してくる隔週の宿題は多くの学生にとって容易な作業ではなかったはずである。学生をLL授業の軌道に乗せる4月、5月は提出物の返却時などに励ましの一言を添えるようにしているが、教師、学

生双方が共にハードルを超える時期でもある。

前期授業で安定した基礎力を養い、後期には会話から解説や説明など、まとまった内容の要点把握やヘッドセット無しの聞き取り指導に進むのであるが、学生は10月後半には中級教材を消化する力をつけ、これを聴解力テストで確認できる段階に達している。この過程に於て、一部の学生のみが伸びるのではなく、聞き取りが不得意であった学生を含め、大多数の学生が伸びを示すところにLL授業のおもしろさがある。

2-3. 授業展開の基本

LL 授業では「教材の見せっぱなし、聞かせっぱなし」は効果的とはいええない。教材を指導目的にそって LL の機能と組み合わせ、いく通りかに使いこなすことが多い。本コースでは授業展開の基本として、聞き取りのプロセスを次のように 3 段階に分けて考え、①から③までを毎回の授業の中で実践した。

①内容のおおまかな聞き取り

②内容の細部にわたる正確な聞き取り

③内容を聞いて推測、判断、結論などを引き出す。

この方法は聞き取りを 3 段階に分けて進めるため、聞き取りが苦手な学習者の負担を減らすことができる。同一教材を用いて①から③まで進めることができるが、単調な感じを与えることを避け、ビデオと音声テープを交互に利用した。

時間配分	教材	学習内容と LL の使い方	学習目的
10 (分)		出席をとる 前回の宿題のコメント 当日の授業内容の明示	学生自身に何を学ぶかを明らかにさせる
15	<i>Listen for It</i>	教材内容を学生テープに録音し、同時に聞き取りドリルを進める	①, ③の習熟
5		再生による個別学習 (聞き取りにくい箇所を各自のペースで学習)	個別学習の導入
10		ドリルの答えあわせ (教材提示装置で答えを学生側ビデオに映す)	答えあわせの効率化
10		ペアワークによる会話の練習 (発声による学習の定着)	次の教材内容への切り替え準備
5	<i>Out of the Blue</i>	ビデオを見せ、同時に学生テープに音声を録音する	会話の場面把握
10		印刷教材を進める	内容理解度をみる
5		答えあわせ、解説、まとめ	
10		ビデオの静止画面を使って重要な表現や聞き取りにくい箇所を説明する	聞き取りを難しくする要因の分析 ②の補強
10	副教材、英語の歌	書き取りの宿題 (<i>Out of the Blue</i>) 英語音声に慣れるための宿題 (説明をしながら教材を高速録音) 学生のペアワークをモニターした結果を述べる	宿題の確認 ②の習熟

2-3-1. 前期授業の授業展開パターン

前期授業では音声テープ (*Listen for It*) で①③を、ビデオ (*Out of the Blue*) で②を指導した。左頁の表はその授業展開パターンである。

前期授業のビデオ教材の宿題は録音した音声を書プロで打ち出してくることであるが、授業時に見た映像がディクテーションのヒントになり、音声を聞きながら場面を想像することができる。書プロについてはキーボードを見ないで打つタッチタイプが必要であり、7号館事務室の協力により希望

する学生にはフリーソフトの練習用フロッピーディスクを持たせ、コンピュータによる習得を勧めた。年間を通じ、クラスの8割以上の学生が書プロで提出物を出し、②の成果を目に見える形で表わすことができた。

2-3-2. 後期授業の授業展開パターン

後期は中級教材に入り、より多くの英語音声を正確に聞き取る指導に重点を置いた。

後期は *Active Listening* の2～3ユニット分を宿題にした。前期と同様、授業枠の中で集中力を要するテープの

時間配分	教材	学習内容とLLの使い方	学習目的
10 (分)		出席をとる 前回の宿題のコメント 当日の授業内容の明示	学生自身に何を学ぶかを明らかにさせる
10	小テスト (<i>Listen for It</i>)	編集テープによる中級レベルの聞き取りテスト	②の仕上げ
5	<i>Active Listening</i>	①, ③を学ぶポイントを説明	学習目的の確認
15		教材内容を学生テープに録音し、同時に聞き取りドリルを進める	①, ③の習熟
10		教材提示装置、または口頭による答えあわせ (この間に宿題テープを高速録音) 会話練習	答えあわせと宿題の録音を同時進行
10	<i>Headway</i>	ビデオを見せ、同時に学生テープに音声を録音する	内容の概略を映像でつかむ
10		内容理解を試す質問をする (直接聞く、またはインカムを使う)	学生の何割が理解したかを把握する
10		スクリプトによる全内容の確認 (音声に学生の声を重ねて読ませ、これをモニターで確認する)	②の習熟
10	副教材	授業内容に関連するビデオを見る	授業のまとめ

聞き取りを初めに進め、音だけの学習からくる疲労をこの後の発声によって拡散するよう設定した。短時間ではあるが、「聞く」から「話す」に移行することにより、時間を無駄にすることなく次のビデオ教材に進む準備ができる。

3. LL 指導の効果

今回の LL 授業の成果は中間試験や学年末試験だけでなく、3回にわたる聴解力テストの結果に表われていると言えよう。学生はこのクラスの他にも英語の授業を受けており、そうした影響を加味した場合、LLのみを強調するのは無理があるが、聴解力養成に大きく貢献したことは否定できないと思われる。

授業開始にあたり、標準テストを実施したいと考えたが、これには事前の準備が必要であり、他の方法¹⁾で実施することにした。TOEIC 対策用のテキストを使用し、リスニング部門の Part II で代用した。これは30問から成るコミュニケーション能力重視の応答問題で、質問に対する答えを3つの選択肢から選ぶ問題である。文字情報はなく全て音声で行なわれる。第1回

目は LL を始める前の4月24日、第2回目は10月23日、第3回目は12月4日に実施した。このうち、1回目と3回目は全く同じテストを、2回目はレベル、形式とも同じであるが質問内容だけを変えて行なった。

クラスの総人数は39名であるが、3回のテストに全て参加した32名の学生を対象とし、学生ひとりひとりの得点差を調べた。なお、このテストでは30問正解で総得点30とし、1回目と2回目の得点差、1回目と3回目の得点差を記録した。以下は上昇を+、下降を-で表わした得点差の表である。

この表から、ほとんどの学生が得点数を上げていることがわかる。ただし、学生それぞれの実際の得点と照合した場合、必ずしもプラスの得点差の少ない学生が伸びなかったとは言い切れないうのである。担当クラスは能力別編成でなく、もともと聴解力に差のある学生が混じっている。概して、1回目の得点数が低かった学生の伸び率が高く、1回目に既に26~28をマークした学生の伸び率が低く出たのは、このテストがそうした学生の伸びを計りきれなかったとみることもできる。初めに優れた聴解力を示した学生についても

	聴解力テスト																学生数 (32名)			
2回目との差	+1	+2	-1	+6	+3	+2	+7	-3	+4	+4	+3	+3	+6	+9	+4	-1	+4	+1	-2	+3
3回目との差	+2	-4	+4	+3	0	+2	+3	+1	+3	0	-1	+1	+2	+6	+10	-3	+6	+3	0	+5

+1	+1	+7	+6	+7	+4	+2	+3	+2	+5	+8	-1
0	+2	+3	+3	+6	+2	+5	0	0	+2	+9	0

第1回最低得点数12 最高得点数28 クラス平均点18.06
 第2回最低得点数16 最高得点数27 クラス平均点21.19
 第3回最低得点数15 最高得点数28 クラス平均点20.38

その後の伸びを計り、その数値を盛り込むことができれば、上昇率はさらに期待できたと思われる。その点については残念であるが、実際にこの表にみる限り、学生は全体として順調に伸びたことがわかる。

LLではモニター、インターカムで反応力を見る場合があり、学生の伸びを手応えとして感じることも多い。また、ディクテーションのエラー・アナリシスは具体的に目で確認できる方法である。聞き取れない箇所が、前期初めは文の単位であったのが徐々に短くなり、後期初めには前置詞など弱く速く発音される単語に移っていく過程をみるのは教師として楽しみであった。この他にも後期の小テストの記録があり、総じてほぼ8割以上の正解率で安定していた。学生のレベルに合わせ、小テスト用に編集した音声テープが学生の学習意欲を喚起したのか、学生が真剣に取り組む表情が印象的であった。

4. 今後の課題

—教育支援体制の充実化—

言語学習に関する工学を研究し、外国語教育専門家としてLL利用の実践活動に従事したジョセフC.ハッチンソンは『言語教育の基本問題』にまとめられた12章「語学ラボラトリー——施設と利用」の中で次のように述べている。

他の道具や機器と同様に、上手に使いこなせる堪能な熟練者の手にあ

るとき、語学ラボラトリーは最大の効果を発揮できる。現代外国語の有能な教師の誰もが知っているように、語学ラボラトリーの効果的利用をもたらすのは少なくとも次の5つの要素の複合体である。(1) 教師、(2) 教材、(3) テストと評価のプログラム、(4) 学習者の練習時間、(5) 施設。語学ラボラトリーが期待どおりの効果を上げるためには、上に述べた要素の各項目が一定の基準を満たすものでなければならない。

最近のLL教育は設備の充実化、教材の多様化に特徴がある。これまでLLの管理、運営を主な仕事としてきたLLスタッフが教材製作の技術面を担当することが増えたと言える。質の高いLL教育を実践するためには、ハッチンソンが述べた5つの条件に加え、LL専門スタッフの存在を強調する必要がある。

本コースの授業運営については、手間と時間のかかる編集作業は4406教室を管理する梶川恭子氏の協力を頼み、学習成果をあげることができた。学生が短い期間に初級から中級教材に進めたのは梶川氏の技術面の応援あつてのことである。現在の立教大学のLL教育は支援体制の基盤が弱く、授業が進めやすい環境にあるとは言い難い。教育支援体制の充実化は緊急に検討されるべきであろう。

5. おわりに

LL 指導で実感することは、教育の持つ可能性の魅力である。学生は授業を通じて自己の能力に気が付き、積極的な取り組みをみせるようになるのであるが、この過程を見守り、応援できることは教師として変わらぬ喜びである。担当クラスの学生は既にリスニング・アレルギーを忘れ、次のステップに進む力を蓄えていることであろう。自信をつけた学生には学外での力試しを勧めたい。夏休みに「英語夏期実力アップ講座」で TOEIC 対策の LL 指導をしたのであるが、これに参加した学生が本番で840点のスコアを出したと報告に来た時があった。その表情が今でも眩しく、忘れられない。

本コースは2年次からの受講であるが、本年度の成果と学生の期待を考えると、1年次から始め、2年次に中級から上級レベルの内容を引き継ぐようなクラスが欲しい。本コース終了時の学生のリスニング力は、実際の英語のコミュニケーションには、まだ不十分だからである。

この授業を円滑に進めるために、梶川氏をはじめ、7号館スタッフ、新座3号館スタッフの方々に協力を求めた。新座の宮内文隆氏、池尻寛子にはビデオの問い合わせで度々お世話になったが、いつも変わらぬ丁寧な対応で教材研究を助けて頂いた。有り難いかぎりである。本年度アクティブ・リスニング・コースに参加した学生はこうした

サポートを受け、精一杯の努力をみせた。大学がこの成果に応える時が来ているように思われる。

註

- 1) 第1回目、第3回目聴解力テストは『TOEIC 完全模試』
第2回目は *Win the TOEIC Battle* より、それぞれ Part II で行なった。使用テキストは以下を参照。
松本茂・Delight.K.West. 1990. 『TOEIC 完全模試』株式会社アルク
Gossman D. L. and O'Connor F.H. 1988. *Win the TOEIC Battle*. New Jersey : Prentice-Hall Inc.

参考文献

- 東眞須美編著 1992. 『英語科教育法ハンドブック』(大修館書店)
- A.ボールドマン編(鳥居次好他訳注) 1974. 『英語教育の基本問題』(大修館書店)
- 天野一夫監修・羽鳥博愛編著 1977. 『LL 指導の理論と実践』(桐原書店)
- 安藤昭一編 1991. 『英語教育現代キーワード事典』(増進堂)
- Flowerdew, John. 1994. *Academic Listening*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hughes, Arthur. 1989. *Testing for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hutchinson, Tom and A. Waters.

1987. *English for Specific Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 恒田直己編集 1979.『英語教育学研究ハンドブック』(大修館書店)
- キャロル, J.B. (大学英語教育学会編・訳注) 1972.『英語の評価と教授』(大修館書店)
- LLA 関東支部編 1995.『メディア活用マニュアル』(リーベル出版)
- Lightbown, P. M. and N. Spada. 1993. *How Languages are Learned*. Oxford: Oxford University Press.
- 松畑熙一 1991.『英語授業学の展開』(大修館書店)
- M. A. K. ハリデー, A. マッキントッシュ, P. ストレブズ (増山節夫訳注) 1977.『言語理論と言語教育』(大修館書店)
- Numan, David. 1988. *The Learner-Centred Curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rivers, W. M. 1968. *Teaching Foreign - Language Skills*. Chicago: The University of Chicago Press.
- ロバート・ラドー (門司勝・本田漢・吉田一衛・松畑熙一翻訳解説) 1971.『言語テスト』(大修館書店)
- Robinson, Pauline. 1991. *ESP TODAY : A Practitioner's Guide*. Hemel Hempsted: Prentice Hall International.
- 鈴木博編 1975.『主要文献・総索引』『講座・英語教育工学』第6巻 (研究社)
- 竹蓋幸生 1989.『ヒアリングの指導システム』(研究社)
- 田崎清忠 1969.『英語教育技術』(大修館書店)
- 田崎清忠 1978.『英語教育理論』(大修館書店)
- 米山朝二・佐野正之 1983.『新しい英語科教育法』(大修館書店)
- (全学共通カリキュラム運営センター
非常勤講師)